

半田美永編



阪中正夫文学選集

阪中正夫文集

江蘇工業學院圖書館
藏書章

半田美永編

和泉書院

編者紹介

半田美永（はんだ よしなが）

1947年8月、和歌山県生まれ。1978年3月、皇學館大学
大学院博士課程単位取得修了。智辯学園和歌山中学・高
等学校教諭等を経て、現在、皇學館大学文学部教授。

著書『紀伊半島をめぐる文人たち』（1987年1月、ゆの
き書房）、『劇作家阪中正夫一伝記と資料』（1988年5月、
和泉書院）、編著書『阪中正夫集』（1979年6月、ゆのき
書房）、『山塊一本城遺稿』（1984年5月、教育出版セン
ター）、『証言阪中正夫』（1996年4月、和泉書院）、『伊
勢志摩と近代文学』（1999年3月、和泉書院）など。

現住所 〒516-0001 伊勢市大湊町264-74

阪中正夫文学選集

近代作家文学選集 第二巻

2001年3月15日 初版第一刷発行

著 者 阪 中 正 夫
編 者 半 田 美 永
発 行 者 廣 橋 研 三

〒543-0002 大阪市天王寺区上汐5-3-8

電話 06-6771-1467 振替 00970-8-15043

発 行 所 有 限 公 司 和 泉 書 院

ISBN4-87088-0095-X C0392 印刷/製本・亜細亜印刷 装訂・森本良成

目次

第Ⅰ部 詩集篇

詩集

六月は羽搏く

..... 3

白鳥省吾・序

..... 5

自序

..... 7

樹木を植ゑる

..... 9

芝の焼けるのを見る (11) 田舎 (14) 農夫の帰り (17) 鶉 (20)

ある夕景 (22) 芽ばえ (25) 蓮池 (28) 梅一 (31) 梅二 (32)

樹木を植ゑる (34) 川 (37) 川船 (40) 六月 (43) 鮎狩り (47)

野菜畑 (50) 苗代 (52) 朝 (54) 四季 (55) 夏蜜柑 (59)

蜜柑の花 (61) 墓地に眠る子供よ (62) 雲雀 (64) 蜂 (66)

雨の降る日に(69) あの日(71) 古巣(73) 芸術について(75)

梨(78) 故郷(80)

木の芽 83

焼鳥をたべて(85) 衣裳をもてあそぶ(87) 木の芽(89)

小鳥を見捨てよ(91) 雅かな婦人(93) 花卉(95) 鮎かけ(97)

裸体デッサン(100) 白薔薇讃(102)

詩劇 105

感傷に殉死せしある植字工の死の前夜の独白(107)

第II部 戯曲篇

鳥籠を毀す 127

馬——ファース 150

田舎道 192

故郷	211
傾家の人	231
町人	255
阪中正夫略年譜	299
阪中正夫著作一覽	309
I 単行本 (309)	
II 講座・作品集等収録 (310)	
III 雑誌・新聞・プログラム類掲載 (311)	
IV 放送台本 (314)	
舞台上演記録覚書	316
ラジオドラマ放送記録	319
解説に代えて	322

第 I 部
詩
集
篇

詩集

六月は羽搏く

謹しんで この詩書を
畏友保田龍門兄に捧ぐ

——わが愛のあかしのために——

白鳥省吾・序

第一詩集を出す心持ほど純粹な喜びはない。阪中君が今度はじめての詩集を出すに就いてその序を私に書けといふ。私は君のその若しい鼓動を感じて、遠い十年前の記憶を新たにする。私は阪中君との面識は浅く、その詩を通読するに、素朴な現実味を帯びた詩風は、敢て特殊なものではない。しかし自然と人生からの映像を飽くまでも追及してゆく真実性は何よりも尊く思はれる。詩に対する愛を深く持つ人ならではの詩は書けない。楽しい成長が其処にある。

また、その詩の表現にやや散漫なところがないではない。しかし粗雑を感じさせないデリカシーを持つてゐる。この銜気ない本質が私に好ましい。

紀州の生んだこれまでの詩人には、愛慾と諧調の詩人としての佐藤春夫君と、社会的情熱の詩人としての加藤一夫君とがある。それらの人は小説や評論の余業としてのやうに詩を書いてゐるが、いま若き新進の詩人に田園を基調とした阪中正夫君を加へたのは、今後の紀州詩壇のためにも喜びでなければならぬ。

文芸の田園味といふものが力説されて、年を追うて徹底してゆく傾向があるが、小説、戯曲、詩の方面のうちで、何と云つても、今のところ詩がその先駆を務めてゐる。どれだけの土の味ひ、田園味といふやうなものが、今の小説、戯曲にあるかと云ふことを考へると寂しい位だ。それらが持つべくして持ち得ない要素を今の詩壇こそ豊富に持つてゐる。

そして阪中君は実にその新しい一人であることを私は喜ぶ。

自序

私の第一詩集も世に出る日が来た。今から振り返つて見ると、詩作し初めてから五年の歳月は流れ去つてゐる。その間、絶えず詩のために苦しみ、また詩のために慰められて来た。勿論私にとつて詩は私の生命ではない、また生活の全体でもない。けれども詩は私に於ては生命に表現を与へてくれる唯一のものであつた。だから私は詩を自己の世界で絶対的価値だと信じてゐる。ある人人ではそれは遊戯でもあり得やう、また他のある人人ではそれは悲しき玩具でもあり得やう。それと等しく私に於ては生命に具象を与へる唯一のものである。私はその唯一なるもののために、自らの生活を發展させてゆけば足りる。純一になつて精進すればいい。恵まれるか恵まれないかは批判の彼方において、ひたぶる本来の声にのみ耳をかしげて私は創作すればいいのだ。

よしや恵まれない詩の生涯であつても、唯一の道だと思惟してゐる以上は私には喜びが来るに違ひない。私は私の真の意味のなすべきことをなしましたなすのであるから。

また何が恐ろしいと云つたところで、生命の空虚を感じる程恐ろしいことはない。生きてゐながら生の実感にふれることの出来ない程恐ろしいことはない。幸にも私は詩によつてそこから救はれて来た。私はこれ

からも思索し、哲学し、観察することを勉めると共に詩作に精進するであらう。一つでもより多く自らの収穫でもつて、自らの存在を充たし、自らの手で自らの墓碑を建ててゆくであらう。

また、忘れがたい人人には古くは小布施にある桜井、同郷の田端等がある。昨年の震災で逝かれた厨川白村氏の御好意も忘れがたい。奈良の松村又一君にも心から感謝すべきものがあり、詩集の装幀をしてくれた保田氏へは涙ぐましい程の親しみをこれまで覚えて来た。今更めて本詩集を愛の証のために氏に捧げることとした。尚尊敬する白鳥省吾氏の序文を載けたことは私に過ぎた喜びである。

市外戸塚において

正 夫

樹木を植ゑる

芝の焼けるのを見る

芝の焼けるのを見てゐる味は

到底 都会に住みなれた者には

わからないことだ

想像してさへも見ないであらう

けれども河の岸で

夕暮がた 風の凪いだとき

芝のちろちろと燃えてゆくのを眺めるのは

まつたくの詩そのものだ

燃えてゆくのもなく

白い煙が立ち昇るのでもない

それは美しい詩の章句が表現されてゆくのである

この眺めは

愁傷の深い秋よりも